

元徳秀の受容

……李華・元結における元徳秀像について……

An Imagery of Yuan De Xiu (元徳秀)

加藤 敏

Satoshi Kato

はじめに

元徳秀（六九五～七五三）、字紫芝が、族弟であった元結（七一九～七七二）の復古的な儒教意識や文学観の形成に大きな影響を与えていたことは、すでに言及されている。また元徳秀は、元結のみならず、李華・蕭穎士・房琯・蘇源明らの士人たちにも信奉され、ことに古文派の人々にとってはシンボリックな存在であったと言われている。

彼はまた、後代の士人たちにとっても敬慕の対象であった。例えば孟郊（七五一～八一四）・皮日休（八三四？～八八三？）らは、元徳秀をたたえる作品を残している。このうち、皮日休は「七愛詩」其四で元徳秀について次のように詠じている。

吾愛元紫芝 吾は愛す 元紫芝
清介如伯夷 清介なること伯夷のごとし
輦母遠之官 母を輦きて遠く官に之き
宰邑無玷疵 邑に宰たりて玷疵無し
三年魯山民 三年にして魯山の民は
豊稔不暫饑 豊稔 暫くも饑えず
三年魯山吏 三年にして魯山の吏は

清慎各自持	清慎 各自ら持す
只飲魯山泉	只だ魯山の泉を飲み
只采魯山薇	只だ魯山の薇を采る
一室冰檠苦	一室 冰檠苦しく
四遠声光飛	四遠に声光飛ぶ
退歸旧隱来	旧隱に退歸し来り
斗酒入茅茨	斗酒もて茅茨に入る
雞黍匪家畜	雞黍 家に畜ふるに匪ず
琴尊常自怡	琴尊 常に自ら怡しむ
尽日一菜食	尽日 一菜食
窮年一布衣	窮年 一布衣
清似匣中鏡	清なること匣中の鏡に似
直如琴上絲	直なること琴上の絲のごとし
世無用賢人	世に賢人を用ゐる無く
青山生白髭	青山 白髭を生ず
既臥黔婁衾	既に黔婁の衾に臥するや
空立陳寔碑	空しく陳寔の碑を立つ
吾無魯山道	吾に魯山の道無く

空有魯山辞 空しく魯山の辞有り

所恨不相識 恨む所は相識らざることなり

援毫空涕垂 毫を援けば空しく涕垂る

この「七愛詩」六首は、房玄齡・杜如晦（真相）、李晟（真将）、盧鴻（真隠）、元徳秀（真吏）、李白（真放）、白居易（真才）の七人を詠じたものであるが、その序、

立大化者、必有真相。以房杜為真相焉。定大乱者、必有真将。以李大尉為真将焉。傲大君者、必有真隠。以盧徴君為真隠焉。鎮澆俗者、必有真吏。以元魯山為真吏焉。負逸氣者、必有真放。以李翰林為真放焉。為名臣者、必有真才。以白太傅為真才焉。

（大化を立つる者には必ず真相有り。房杜を以て真相と為す。大乱を定むる者には必ず真将有り。李大尉を以て真将と為す。大君に傲る者には必ず真隠有り。盧徴君を以て真隠と為す。澆俗を鎮むる者には必ず真吏有り。元魯山を以て真吏と為す。逸氣を負ふ者には必ず真放有り。李翰林を以て真放と為す。名臣為る者には必ず真才有り。白太傅を以て真才と為す。）

には、彼らが敬慕すべき人士として取り上げられた理由がそれぞれ示されている。さらに各作品の末において、皮日休はそれぞれの人物に対する思いを述べ、あるいは評価を下しているが、このうち第一首と第三首は末四句を「粵吾……」、第二首と第四首は「吾……」という形式にそれぞれ統一し、対象への敬慕の情を吐露している。ことに元徳秀に対しては、「所恨不相識、援毫空涕垂」と言い、親愛の情とともに、時を同じくし、相識となることのできなかった無念さが表出されている。他の六人に対しては「苟得同其時、願為執鞭豎」（房杜二相国）、「願以太平頌、題向甘泉春」（李大尉）、「如教不為名、敢有徴君志」（盧徴君）、「惜哉千万年、此俊不可得」（李翰林）、「仕若不得志、可為龜鏡焉。」（白太傅）と、敬愛の情や自らの生き方の指針としたいという思いを吐露しているが、元徳秀に対する愛惜はことに深かったと思われる。

詩はまず、元徳秀が伯夷にも比すべき清介な人物であったと言い、自らの倫理観を有し、世俗の価値によらず、とりわけ権力や権勢に対して決然としていたことを指摘する。次に官吏としての治績が語られる。彼が魯山県の令となっ

て三年が経過し、任が満ちるころになると、人々の生計は安定し、官吏も清慎となったと述べ、民生の安定と官吏の教化という二つの点が称揚される。また元徳秀が官吏として自らの利をはかることなく、清貧のうちにあったことを皮日休ははっきりと指摘する。民生の安定と魯山の官吏の清慎さとは、元徳秀自身の厳しい自律的な生き方の結果もたらされたというのである。続いて、やがて秩が満ちると、元徳秀は旧隠の地である陸渾に隠棲し、貧困の中で酒と琴を樂しみつつ老いていった、と、退隠後の様子が展開される。死に際して体を覆う満足な衾もなかったとする表現は、元徳秀が極貧の状況にあったことを表すとともに、伯夷に比すべきその清介な人物を象徴的に語るものである。

皮日休はまた元徳秀が不遇の士であったことを見逃していない。世に賢人を用いる能力のある人がいなかったために元徳秀は結局一布衣として埋もれてゆかざるをえなかった、という表現には、元徳秀に対する哀惜がこめられている。「空立」「空有」「空涕垂」という三つの「空」字の繰り返し、社会的に報われることのなかった元徳秀の人生に対する皮日休の思いを十分に伝えている。ここに描かれた元徳秀の姿に、皮日休の時代まで伝えられてきた元徳秀像が反映していることは確かである。それは具体的にはどのようなものであったのか。また元結の元徳秀像とはどのような差異があるのか。本稿は、李華や蕭穎士など、元徳秀と交際していた人物の描く元徳秀像を検討し、あわせて元結のそれとの差異を考察しようとしたものである。

元徳秀、字は延之。幼くして父を失い、母に孝養を尽くしていたが、進士の第にのぼるとまもなく母が亡くなった。その後、開元二十二年に南和県の尉となり、龍武軍録事参軍に転じ、続いて開元二十三年には魯山県の令に出、任が満ちると陸渾の地に隱遁し、そこで生を終えた、とされている。彼についての主要な資料は、

（一）元魯山墓碣銘、三賢論

唐、李華

（二）元魯山墓表

唐、元結

(三) 元徳秀誄

唐、盧載

(四) 旧唐書・文苑伝

(五) 新唐書・卓行伝

である。さらにこの他に『唐国史補』、『明皇雜録』、『唐語林』、『資治通鑑』、蕭穎士「重陽日陪元魯山徳秀登北城矚对新霽因以贈別」、白居易「題座隅」、孟郊「弔元魯山 十首」・「寄義興小女子」、冒頭に挙げた皮日休「七愛詩 其四」などがある。

元徳秀自身の作品といわれるものとしては、『全唐詩補編』に「帰隠」と題する詩が一首残っている。

緩歩巾車出魯山 緩かに巾車を歩ませて魯山を出で

陸渾佳処恣安閑 陸渾の佳処 安閑を恣にす

家無僕妾饑忘爨 家に僕妾無く饑えにも爨ぐを忘る

自有琴書興不闌 自ら琴書有りて興は闌ならず

出典は『古今圖書集成』職方典汝州部。また『魯山県志』（明、嘉靖三十一年刊）にも元徳秀の作として採られている。

この作品にうたわれるのは、魯山令の任期が満ち、陸渾に隠棲したときの元徳秀であり、貧窮と飢餓を忘れて琴書を楽しむ隠者の心境が表出されている。

しかしながらこの作品は語彙や詩想の展開という点で『新唐書』卓行伝の元徳秀の記述と一致する部分が多い。卓行伝には、「歳満、筭餘一緡、駕柴車去。愛陸渾佳山水、乃定居。不為牆垣肩輪、家無僕妾。歳飢、日或不爨。嗜酒、陶然彈琴以自娛。（歳満つるや、筭に一緡を餘し、柴車に駕して去る。陸渾の佳き山水を愛で、乃ち居を定む。牆垣肩輪を為らず、家に僕妾無し。歳飢うれば、日或は爨がず。酒を嗜み、陶然として琴を弾じて以て自ら娛しむ。）とあり、「巾車」・「柴車」、「陸渾佳」・「陸渾佳」、「家無僕妾」・「家無僕妾」、「飢」・「飢」・「爨」・「琴」・「琴」と語彙が一致し、また文章の展開と詩想の展開も同一である。この「帰隠」詩は元徳秀の自作ではなく、『新唐書』の記述の翻案とみるのが妥当であると思われる。このシンボル化された姿は、元徳秀の一解釈なのである。

彼には「蹇士賦」「季子聴楽論」「于焉于」「礼咏」「現題」「道演」などの作が

あったといわれるが、今は全て伝わらない。したがって、元徳秀について考察するにはまず上記の資料によらざるを得ない。

これらのうち重要なのは彼の死後間もなく書かれたであろう(一)(二)(三)である。ここでは李華の「元魯山墓碣銘」を中心として、そこに表象されている元徳秀の像をやや詳細に見てゆくことにしたい。

二、(一) 貧窮と孝養

李華の「元魯山墓碣銘并序」は、冒頭に元徳秀が天宝十二載(七五三)、^(注)陸渾の草堂で五十九歳の一生を終えたことを述べる。

維唐天宝十二載、九月二十九日、魯山令河南元公終於陸渾草堂。春秋五十九。

(維れ唐の天宝十二載、九月二十九日、魯山の令河南の元公陸渾の草堂に終る。春秋五十九。)

李華はその死が、元徳秀を敬慕する者にとって惜しむべきものであったことを言う。

服名節者無不痛心。(名節に服する者は心を痛ましめざるは無し。)

そこで序は一転して元徳秀の終焉の地である陸渾の草堂の様子と葬儀の状況を記し、元徳秀が極貧のなかで最期を迎えたことを明らかにする。

嗚呼、堂内有篇簡巾褐枕履琴杖筆瓢而已。堂下有接賓之位・孤甥受學之室。過是而往、無以送終。名高之士、陸渾尉梁園喬潭、賻以清白之俸、遂其喪葬。以明月十二日、空於所居南岡。礼也。

(嗚呼、堂内に篇簡巾褐枕履琴杖筆瓢有るのみ。堂下に接賓の位・孤甥受學の室有り。是を過ぎて往は、以て終を送る無し。名高の士、陸渾の尉梁園の喬潭、賻るに清白の俸を以てし、其の喪葬を遂ぐ。明月十二日を以て、居る所の南岡に遷る。礼なり。)

堂内に残されていたものは書と琴と身の回りの品だけであった、という描写からは元徳秀が極貧の生活をしていたことと、琴書を楽しみとしていたということが窺われる。また、「接賓之位」があったということは、元徳秀が人々と

の交際を断った生活をしていたのではなかったことを暗示している。「孤甥受学之室」とは、おそらく元結が元徳秀より学を授けられた部屋を指しているであろう。陸渾の草堂における元徳秀の生活は、貧窮の中にありながら、琴書を楽しむ、彼に私淑するものたちとの交流をつづけ、元結に教授する日々であったことが語られているのである。

盧載の「元徳秀誄」(『全唐文』卷四三五)に「誰為府君、犬必啗肉。誰為府僚、馬必食粟。誰死元公、餒死空腹(誰をか府君と為す、犬には必ず肉を啗はす。誰をか府僚と為す、馬には必ず粟を食はす。誰か元公を死せしむる、餓えて空腹に死せしむ)」とあり、また白居易「題座隅」詩の原注には「元魯山山居阻水、食絶而終。(元魯山山居して水に阻まれ、食絶えて終る。)」とある。元徳秀の最期は、おそらく水に阻まれて食糧を得ることができず、餓死するという悲惨なものであった。盧載の誄は、その死に直面し、「なぜこの人が餓死しなくてはならなかったのか」という悲痛な問いかけとともに書かれている。一方李華はそれに直接言及しない。

居無肩輪牆藩之禁、達生齊物、従其所好。時属歉歲、涉旬無烟、彈琴讀書、不改其樂。好事者携酒食以饋之。

(居に肩輪牆藩の禁無く、生に達し物を齊しくし、其の好む所に従ふ。時歉歲に属し、旬に涉りて烟無きも、琴を弾じて書を読み、其の樂しみを改めず。好事の者酒食を携へて以て之に饋る。)

と、貧窮と飢餓のなかでも琴書を楽しむ、身世を忘れて生きた元徳秀の像を結ばせているのである。

李華は元徳秀が常に貧窮のうちにあったことを指摘する。

・公自幼居貧、累服齊斬、故不及親在而娶。既孤之後、单独終身。

(公は幼きより貧に居り、服を累ねて齊しく斬る、故に親在りて娶るに及ばず。既に孤たるの後、单独にして身を終ふ。)

・延州即世之後、昆弟凋落、慈親羸老、無小無大、仰飴於公。

(延州即世の後、昆弟凋落し、慈親羸老なれば、小と無く大と無く、飴を公に仰ぐ。)

・以甥姪婚仕為念、授署魯山令。

(甥姪の婚仕を以て念と為し、魯山の令を授署せらる。)

・歴官俸禄悉以經營葬祭、衣食孤遺。

(歴官の俸禄は悉く以て葬祭を経営し、孤遺に衣食せしむ。)

・又其惡万金之藏、鄙十卿之禄。

(又た其の万金の藏を惡み、十卿の禄を鄙とす。)

これらから窺われるのは、貧窮のうちにありながら、それを恨むことなく、かえって財の蓄積を憎み、高い禄を願はず、一族の生活を維持するために自らを犠牲にしている元徳秀の姿である。この生き方を支えるのは、例えば『論語』に

・貧与賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。(里仁)

(貧と賤とは、是れ人の惡む所なり。其の道を以て之を得るにあらずんば、去らざるなり。)

・飯疏食、飲水曲肱而枕之、樂在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。(述而)

(疏食を飯らひ、水を飲み肱を曲げて之を枕とするも、樂しみ其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我においては浮雲のごとし。)

などであるように、義を重んじ貧賤にも安んじようとする価値観である。元徳秀はこうした価値観を純粹に実践する人物として語られているのである。

また、墓碣銘は、元徳秀の孝養を称揚する。

(一) 不忍離親、躬負安輿、往復千里。

(親を離るるに忍びず、躬ら安輿を負ひ、千里を往復す。)

(二) 丁艱、声動於心。既過苴臬、刺血画仏像写經、不貲之身、申罔極之報。食無鹽酪、居無爪剪者三年。

(艱に丁り、声心を動す。既に苴臬を過ぐるや、刺血して仏像を画き經を写し、不貲の身もて、罔極の報を申ぶ。食ふに鹽酪無く、居るに爪剪無きこと三年なり。)

(三) 黜陟使以至行上聞、授左龍武軍録事、因墜傷足、樂正之憂、愀然滿容。

(黜陟使至行を以て上聞するや、左龍武軍録事を授けらる。墜ち

て足を傷ふに因り、樂正の憂、愀然として容に満つ。）

(一)は、元徳秀が科擧におもむいたとき、母を残しておくにしのびなく、いっしょに連れて行ったのだが、そのとき輿を自ら担って千里を往復したというものである。父母のもとで孝養を尽くす色養が大切であることは、例えば次に挙げる、孝子の誉れが高かった唐の皇甫無逸の話がよく表わしている。時に彼は益州大都督府長史に任ぜられていた。

母在長安疾篤、太宗令駢召之。無逸性至孝、承問惶懼、不能飲食、因道病而卒、贈礼部尚書。太常考行、諡曰孝。礼部尚書王珪駁之曰、無逸入蜀之初、自当扶持老母、与之同去、申其色養、而乃留在京師。子道未足、何得為孝。竟諡為良。

〔旧唐書〕皇甫無逸伝

(母長安に在りて疾篤く、太宗駢をして之を召さしむ。無逸性至孝にして、問を承りて惶懼し、飲食する能はず、因りて道に病みて卒し、礼部尚書を贈らる。太常行を考し、諡して孝と曰ふ。礼部尚書王珪之を駁して曰く、無逸蜀に入るの初め、自ら当に老母を扶持し、之と共に去り、其の色養を申ぬべきに、乃ち留めて京師に在らしむ。子道未だ足らざるに、何ぞ孝と為すを得んや、と。竟に諡して良と為す。)

皇甫無逸は母を赴任先に伴い孝養を尽くさなかったことによって、諡を孝とされなかった。母の危篤を聞いて、身を案ずるあまり卒しても孝とはされなかったのである。母を伴っていった元徳秀の行為は孝道にそったものであった。(二)は母の逝去にあつてから喪に服している時の様子であるが、やはり三年間塩酪を食さないなど、至孝とするにふさわしい過し方をしていたことが語られる。(三)は落馬して足を傷つけたときの様子である。自らの足を傷つけ、孝道を尽くすことができないことを歎いた樂正子春の故事をひいて、元徳秀の孝心の深さを語っている。

墓碣銘においては、貧窮のうちにありながら、孝を尽くした元徳秀の姿が強調されているのである。

(二) 出仕と帰隱

元徳秀の出仕は、一族の生活を支えるためであり、自ら求めて魯山県の令と

なったのも、「以甥姪婚仕為念、授署魯山令。(甥姪の婚仕を以て念と為し、魯山の令を授署せらる。)」とあるように、自分を頼りとする一族の甥姪の婚姻と仕官のためであった。元徳秀が官を辞した経緯については、墓碣銘はただ「代下之日、柴車而返、南遊陸渾、……。」(代下の日、柴車にして返り、南のかた陸渾に遊び、……。))と、交代の時に粗末な車に乗って陸渾に遊んだことを述べるだけである。しかし蕭穎士は「重陽日陪元魯山徳秀登北城矚对新霽因以贈別」の中で「明時当盛才、短伎安所設。何日謝百里、從君漢之滌。(明時盛才に当れば、短伎安くにか設くる所ぞ。何れの日か百里を謝し、君に漢の滌に從はん。))」と、明時には優れた才能を有する人間が相応しい地位を得ており、自らの拙い才能を発揮すべき場所はないから、いつかは県令を辞して元徳秀とともに漢水の岸に遊びたいと述べている。またこの詩の原注には「時元兄屢有挂冠之意。(時に元兄屢しば挂冠の意有り。))」と記す。元徳秀が魯山の県令を辞する思いを抱き続けていたことが窺われる。そうした思いの根底には、蕭穎士が元徳秀と意思を共有しているとすれば、県令としての治績を挙げても結局はそれだけでしかなく、自らの才能を発揮することのできないままにあらざるを得ないという不遇感があつたであろう。

李華の墓碣銘は元徳秀の不遇感に言及するまえに帰隱後の姿を記述する。「居無肩輪牆藩之禁、達生齊物、從其所好。時属歉歲、涉旬無烟、彈琴讀書、不改其樂。好事者携酒食以饋之。陶陶然脱遺身世、涵泳道德、拔清塵而棲顚氣。中古以降、公無比焉。(居に肩輪牆藩の禁無く、生に達し物を齊しくし、其の好む所に從ふ。時歉歲に属し、旬に涉りて烟無きも、琴を弾じて書を読み、其の樂しみを改めず。好事の者酒食を携へて以て之に饋る。陶陶然として身世を脱遺して、道德を涵泳し、清塵より拔んで顚氣に棲む。中古以降、公比するもの無し。))」と述べ、元徳秀は飢餓に苦しんだのではなく、むしろそれに安んじて琴書を樂しみ、賓客との交友を樂しんでいたという。生と死を同一視し、身世を忘れ、陶然として生きた、とするのが李華の解釈する元徳秀の姿である。こうした生き方の根柢となっているのは、李華によると「知我或希、晦而不耀故也。(我を知ること或は希なれば、晦して耀かさざるが故なり。))」という価値観である。これは例えば「論語」に、

・用之則行、舍之則藏。(述而)

(之を用ふれば則ち行き、之を舍つれば則ち蔵す。)

・天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。(泰伯)

(天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る。邦に道有るに、貧

且つ賤なるは、恥なり。邦に道無きに、富且つ貴なるは、恥なり。)

・邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之。(衛靈公)

(邦に道有るときは則ち仕へ、邦に道無きときは則ち巻きて之を懷にすべし。)

と言う態度であり、また『孟子』尽心上に「古之人得志、沢加於民、不得志、脩身見於世。窮則独善其身、達則兼善天下。(古の人志を得れば、沢は民に加はり、志を得ざれば、身を脩めて世に見はる。窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす。)」とある中の、いわゆる「独善」に等しいものであるが、元徳秀は、生活に何の支障もない状況で悠然と独善の日々を過ごしているのではなく、現実の飢えに直面するなかでそれを実現しているのであった。

盧載の誄には、元徳秀は中央に召され、顕彰され、活躍すべき人であったとする思いがこめられ、それほどの人物をうち捨てておいたまま餓死に到らしめた者に対する憤りが吐露されている。李華もここで「是宜為国老、更論道佐世、而羔雁不至、歿於空山。可勝慟耶。(是れ宜しく国老と為りて、更に道を論じ世を佐くべし、而れども羔雁に至らず、空山に歿す。慟するに勝ふべけんや。)」と、国家の教化を司る国老となり、政治に関与すべき人物であったにもかかわらず、招かれることなく空山に死んでいった不遇な元徳秀に対する耐え難い悲しみを表出する。盧載の誄のようにあらわではないが、やはり元徳秀を招き寄せることなく空山にうち捨てておき、死に到らしめた者に対する憤りも託されていると考えることができるだろう。

(三) 治 績

魯山県の令としての治績について墓碣銘は次のような逸話を載せる。

常獲盜未刑、属濱山之郷称、猛獸為害。盜請於庭曰、感明府慈仁。願殺獸贖罪。公哀而許焉。僚佐堅請、公無変慮。乃從破械縱之。盜果屍獸復命。吏人老幼、咨嗟震動、発於庭宇、播於四鄰、則政化之行可知也。

(常て盜を獲て未だ刑せず。属たま濱山の郷称すらく、猛獸害を為す、

と。盜庭に請ひて曰はく、明府の慈仁に感ず。願はくは獸を殺して罪を

贖はん、と。公哀みてこれを許す。僚佐堅く請ふも、公慮を变ふる無く、

乃ち従りて械を破りて之を縱つ。盜果して獸を屍して復命す。吏人老幼、

咨嗟震動し、庭宇に発し、四鄰に播けば、則ち政化の行知るべきなり。)

この話は元徳秀が仁政を行い、信をもって民に臨んだことを表しており、李華はこの一事でそれを象徴させている。この他、元徳秀には県令時代の「于葛于」にまつわるエピソードがある。これは唐の鄭処誨の『明皇雜録』に見え、『新唐書』、『資治通鑑』、『太平広記』も載せているものである。

玄宗在東洛、大酺於五鳳楼下。命三百里内県令刺史、率其声楽来赴闕者、或謂令較其勝負而賞罰焉。時河南郡守命楽工数百人於車上、皆衣以錦繡、服廂之牛、蒙以虎皮、及為犀象形状、觀者駭目。時元魯山遣楽工数十人、聯袂歌于葛。于葛、魯山之文也。玄宗聞而異之。徵其詞、乃歎曰、賢人之言也。其後上謂宰臣曰、河内之人、其在塗炭乎。促命徵還、而授以散秩。

(玄宗東洛に在り、大いに五鳳楼下に酺す。三百里内の県令刺史に命じ、其の声楽を率ゐて来りて闕に赴かしむれば、或ひと謂へらく、其の勝負を較せしめて賞罰せんとす、と。時に河南郡守楽工数百人を車上に命じ、皆衣るに錦繡を以てせしめ、服廂の牛は、蒙るに虎皮を以てせしめ、及び犀象の形状を為せば、観る者目を駭かす。時に元魯山楽工数十人をして、袂を聯ねて于葛を歌はしむ。于葛は、魯山の文なり。玄宗聞きて之を異とす。其の詞を徴して、乃ち歎じて曰はく、賢人の言なり、と。其の後上宰臣に謂ひて曰はく、河内の人、其れ塗炭に在るか、と。促し命じて徵還せしめ、授くるに散秩を以てす。)

『資治通鑑』によると、これは開元二十三年(七三三)正月の出来事である。元徳秀が歌わせた于葛于(『明皇雜録』では「于葛」)は、散逸して伝わらないが、葛(懷州の古名)の人々の窮状を訴える歌だったと思われる。一首の歌謡

が政治を動かした例であり、元結や杜甫らの楽府を考えるうえでも重要な出来事であるが、李華はその作品名を挙げるのみで、この話は伝えていない。李華だけではなく、孟郊や皮日休、そして元結にも言及が見られない。このような事件は、官吏の治績の上では些事であったのか、あるいは理想的な官吏の像には相応しくなかったのか、また別に考察したい。少なくともこの墓碣銘においては、元徳秀の県令としての仁政を顕彰することが主眼だったのであると思われる。

三、

李華は「三賢論」のなかでこれまで見てきた元徳秀像を総括するかのようになり、元奉親孝、居喪哀、撫孤仁、徇朋友之急、莅職明於賞罰、終身貧而樂天命焉。

(元は親を奉じては孝、喪に居りては哀、孤を撫しては仁、朋友の急に徇ひ、職に莅みては賞罰に明らかにして、終身貧なれども天を楽しみ命を知る。)と述べている。また、「三賢論」では、元徳秀の姿を見るだけで、仁愛が感じられる程であった、

瞻其形容、不俟其言而見其仁。

(其の形容を瞻れば、其の言を俟たずして其の仁を見る。)

と言ひ、さらに房琯と蘇源明の、

・毎見魯山、則終日嘆息、謂予曰、見紫芝眉宇、使人名利之心尽矣。

(魯山を見る毎に、則ち終日嘆息し、予に謂ひて曰はく、紫芝の眉宇を見れば、人をして名利の心尽くさしむ、と。)

・毎謂當時名士曰、使僕不幸生於衰俗、所不恥者、識元紫芝。

(毎に當時の名士に謂ひて曰はく、僕をして不幸にも衰俗に生まれしむるも、恥とせざる所の者は、元紫芝を識ることなり、と。)

李華にとって、元徳秀は一生貧窮のうちにありながら、親に孝養を尽し、一族の残されたものたちの生活を支え、官吏としての治績を残し、本来与えられ

べき地位につくことはできなかったが、天命を知りつつそれを楽しんでゆったりと一生を終えた人物として捉えられているということができよう。

後代の元徳秀の姿は、ほぼこの李華の描く元徳秀像と一致し、それぞれに多少の陰影が加えられている。冒頭に挙げた皮日休の「七愛詩」の他、例えば孟郊の「弔元魯山 十首」などもそうである。この連作には、

・搏鷲有餘飽 搏鷲 余飽有るも

魯山長飢空 魯山 長に飢空

豪人飫鮮肥 豪人 鮮肥に飫くも

魯山飯蒿蓬 魯山 蒿蓬を飯す (其一)

・魯山食更貧 魯山 食更に貧し (其二)

・所以元魯山 元魯山

飢衰難与偕 飢衰して与に偕ひ難き所以なり (其四)

・賢人潔腸胃 賢人は腸胃潔ければ

寒日空澄凝 寒日 空しく澄凝たり (其五)

と、飢えのイメージが繰り返して表れている。しかし李華の墓碣銘にあるごとく、飢えを超越して琴書を楽しんでいたというイメージはここには見られない。孟郊は、元徳秀を高潔であったが故に世俗に入れられず、飢えにさいなまれざるをえなかった存在として捉えているのである。また其六では、

言從魯山宦 言に魯山の宦に従ひ

尽化堯時心 尽く堯時の心に化す

豺狼恥狂噬 豺狼は狂噬するを恥ぢ

齒牙閉霜金 齒牙 霜金を閉ざす

競來闢田土 競ひ來りて田土を闢き

相与耕嶽岑 相与に嶽岑を耕す

当宵無閑鎖 宵に当たりて 閑鎖無く

竟歲饒歌吟 竟歲 歌吟饒し

と、元徳秀の治績をうたう。さらに其八では、

幽埋尽洗洗 幽埋 尽く洗洗し
 滞旅免流浪 滞旅は流浪を免れしむ
 唯餘魯山名 唯だ余す 魯山の名
 未獲旌廉讓 未だ廉讓を旌すを獲ず

と、元徳秀のみがいまだに顕彰されていないことを指摘する。この意識はそのまま李華の墓碣銘のそれと等しいものである。

この他、

・黄犢不知孝 黄犢は孝を知らざれば
 魯山自駕車 魯山 自ら車を駕す
 非賢不可妻 賢に非ざれば妻るべからざれば
 魯山竟無家 魯山 竟に家無し
 供養恥佗力 供養 佗力を恥づ
 言詞豈纖瑕 言詞 豈に纖瑕あらんや

(其九)

・遺嬰尽雛乳 遺嬰は尽く雛乳す
 何況肉骨枝 何ぞ況や肉骨の枝なるをや
 心腸結苦誠 心腸 苦誠結し
 胸臆垂甘滋 胸臆 甘滋垂る

(其十)

のように、元徳秀が母を載せて自ら車を駕したこと、終生娶らなかつたこと、一族中の孤児に自ら乳を与えたことがうたわれている。このうち自ら乳を与えたという話は李華の墓碣銘には見られないものであるが、例えば『唐国史補』にも「元魯山自乳兄子、数日而乳湏流。兄子能食、其乳方止。(元魯山自ら兄の子に乳せんとするや、数日にして而乳湏流す。兄の子能く食らへば、其の乳方めて止む。)」とあり、このような逸話が広く伝えられていたようである。

李華の描いた元徳秀の像は、ほぼそのままに後代に伝えられている。元徳秀を称揚する士人たちは、李華や蕭穎士ら古文家を中心としつつも、時代を越えて、さらに広い範囲の科挙官僚に広がっている。孟郊や皮日休の作品にみられ

るように、彼らは元徳秀の姿のなかに自らの希求する生き方、あるいは自らと共有する不遇感を見て取り、そこに自らのさまざまな思いを託し、また自らのあり方を確認していたのであろう。

おわりに

元結は、どのように元徳秀の存在をとらえていたのであろうか。彼の『元魯山墓表』は、まず元徳秀が亡くなったことを述べ、元結の悲しみの深さを門人叔盈との問答の形で闡明にしている。

天宝十三年、元子従兄前魯山大夫徳秀卒。元子哭之哀。門人叔盈問曰、夫子哭従兄也哀。不亦過乎礼歟。対曰、汝知礼之過、而不知情之至。叔盈退謂其徒曰、夫子之哭元大夫也、兼師友之分、亦過矣。元子聞之、召叔盈謂曰、吾誠哀過。汝所云也。

(天宝十三年、元子の従兄前の魯山の大夫徳秀卒す。元子之を哭すること哀し。門人叔盈問ひて曰く、夫子従兄を哭するや哀し。亦た礼に過ぎずや、と。対へて曰はく、汝は礼の過ぐるを知るも、情の至るを知らず、と。叔盈退きて其の徒に謂ひて曰はく、夫子の元大夫を哭するや、師友の分を兼ねるも、亦た過ぎたり、と。元子之を聞き、叔盈を召して謂ひて曰はく、吾誠に哀過ぎたり。汝の云ふ所なり。)

次に、

元大夫弱無所固、壯無所專、老無所存、死無所餘。此非人情。人情所耽溺喜愛、似可惡者、大夫無之。如戒如懼、如憎如惡、此其無情。此非有心。……

(元大夫弱にして固にする所無く、壯にして専らにする所無く、老いて存する所無く、死して餘す所無し。此れ人情に非ず。人情の耽溺して喜愛する所の、惡むべきに似る者は、大夫之無し。戒むるがごとく懼るるがごとく、憎むがごとく惡むがごとく、此れ其れ情無し。此れ有心に非ず。……)

と、元徳秀が幼時より固執するということがなく、人々が耽溺し求めるよう

なものへの執着は一切なかったことを述べている。これは世俗の価値観によらない清介な生き方である。清介さは元結がまた称揚するものであり、彼は「自箴」の中で「処世俗清介、人不若害。（世俗に処すること清介なれば、人若を害せず。）」と述べ、清介ということを経世の重要な態度であるとしている。続いて元徳秀の生き方をもって世俗を教化したい思いを述べる。

嗚呼、元大夫生六十餘年而卒。未嘗識婦人而視錦繡。不頌之、何以誠荒淫侈靡之徒也哉。未嘗求足而言利、苟辞而便色。不頌之、何以誠貪猥佞媚之徒也哉。未嘗主十畝之地、十尺之舍、十歲之童。不頌之、何以誠占田千夫室宇千柱家童百指之徒也哉。未嘗阜布帛而衣、具五味而食。不頌之、何以誠綺紈梁肉之徒也哉。於戲、吾以元大夫德行、遺來世。清独君子、方直之士也歟。

（嗚呼、元大夫生まれて六十餘年にして卒す。未だ嘗て婦人を識りて錦繡を視ず。之を頌せずんば、何を以て荒淫侈靡の徒を誡しめんや。未だ嘗て足るを求めて利を言ひ、辞を苟にして色を便にせず。之を頌せずんば、何を以て貪猥佞媚の徒を誡しめんや。未だ嘗て十畝の地、十尺の舎、十歳の童に主たらず。之を頌せずんば、何を以て占田千夫室宇千柱家童百指の徒を誡しめんや。未だ嘗て布帛を早くして衣、五味を具へて食はず。之を頌せずんば、何を以て綺紈梁肉の徒を誡しめんや。於戲、吾元大夫の徳行を以て、来世に遺さん。清独の君子、方直の士なるかな。）

ここに描かれているのは荒淫や奢侈を好まず、利を求めることも佞ることもしない正直さを有し、富貴を拒絶する元徳秀の姿である。人情を有しない清介さが際立って示されており、孝養を尽くし、一族の甥姪のために尽くす姿や、魯山県の令としての治績、退隱後の身世を忘れて琴書を樂しむ姿には全く触れていない。無論飢えについても言及されていない。親しく教えを受ける元結の目に映じたのは、官吏としての治績を挙げ、帰隱後琴書を樂しむ元徳秀ではなく、厳しく自らを律し清介に生きる姿であったと思われる。

天寶七載から十二載頃に書かれたと推測される作品のなかで、元結は世俗に對する強い警戒心を表明している。例えば「出規」では、長安に遊んだ門人叔将が貴顯と交わった経験を語るといふ設定で、「有向与飲宴、過之可弔。有始

賀拜侯、已聞就誅。（向に飲宴を与にし、之に過りて弔すべき有り。始め侯を拜するを賀し、已に誅に就くを聞く有り。）」と、貴顯に在るものがいかに容易に失脚するものであるかを言い、「叔将之身、如犬逃者五六、似鼠藏者八九。（叔将の身も、犬の逃ぐるがごとき者五六にして、鼠の藏るるに似る者八九なり。）」と、それに交わることがいかに危ういことであるかを指摘する。また「心規」では、「子行于世間、目不随人視、耳不随人聽、口不随人語、鼻不随人氣。……不爾、有滅身亡家之禍、傷汚毀辱之患生焉。（子世間を行くや、目は人の視るに随はず、耳は人の聴くに随はず、口は人の語るに随はず、鼻は人の氣に随はざれ。……爾らずんば、滅身亡家の禍、傷汚毀辱の患生ずる有らん。）」と世俗の危険を極言する。

この時期の元結は、世俗を退廃した危険なものと見て拒絶するという消極的な態度や、清介さをもって処して行くといった生硬な意識が強かったようである。ところがこの墓表では、元徳秀の生き方を称揚することによって世俗を戒めようと言う。まさしくこのことによって元徳秀の死は元結にとって意味を持ってくるのであり、また元徳秀の存在が元結自身のうちに確認されるのであろう。しかし元結の元徳秀像は李華のそれとは異なり、後代に受け継がれて行くことはなかった。

（注）元徳秀の卒年の記述について、元結の「元魯公墓表」では、「天寶十三年、元子從兄前魯縣大夫徳秀卒。」と記し、『旧唐書』文苑伝、『新唐書』卓行伝も同様である。一方、李華の墓碣銘のみは天寶十二載とする。植木久行氏は墓碣銘の誤訛としておられるが、いまこれによる。

参照「唐代作家新疑年録（4）」（『文経論叢』第二六巻第三号 人文学科篇 XI 弘前大学人文学部 一九九一）